
とある普通な能力者達

藻部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある普通な能力者達

【Nコード】

N6935Z

【作者名】

藻部

【あらすじ】

この作品はとある科学のレールガンに出る『学園都市』にいる（多分）普通の生徒たちの日常を、なんとなく描いてく（予定）です。後、魔術師は出てこないから（これ絶対）とある科学のインデックスあんまり関係ないかも。更新は不定期＋超遅い

キャラ紹介（前書き）

ちなみに、ネタバレ有り。（主に能力？）

物語が進むごとに増えていたり、加わったりすると思います。

キャラ紹介

ネコ

彼の者は野良である。名前は随々時募集中。（実際にするかな？、
どうだろ？）

一応メスという噂。

花沢 甲斐はなわけ かい

役職：学生

能力名：翻訳通話リスントーカー L V 3

内容：動物などの言語が分かる能力。

レベル3だと動物相手に話すこともできる。そのため動物に対していきなり怒鳴ったりして変視されることもある。

寿 黄菜子ことぶき せう

役職：風紀委員ジャッジメント

能力名：念動能力テレキネシス L V 2

内容：物を浮かしたりするポピュラーな能力

レベル2だと警備ロボを浮かすくらい？全力でギリギリ人を少し（3ミリ）浮かすことができる、とか。自分は浮かせれないとかW（本人談）

桃桜 ももざくら
花華 はなが

役職：委員長（別名オールリーダー）

能力名：読心能力（仮） LV3

内容：大体、人の考えることは理解できると言うものはず。もう少し高くなると複数人同時に分かるようになるらしい。

高島郡兎 たかしまぐんじ

役職：ウマ・シカ

能力名：土操作系 LV2

内容：ちよつとその奥さん見てくださいよ。なんとこの能力、発動すると土（コンクリート等人口のものや石、岩など硬いものは無理）を耕すことができるんですよ。（黄菜子談）

ちなみに、これ以外のことはほぼできないに等しい。

キャラ紹介（後書き）

能力名はW K 調べ+オリジナル。

感想と活動報告で何かアイデアをくれるとうれしいです。

感想返し（前書き）

感想が着ました。うれしい限りです。ありがとうございます。
さて、そんなわけで感想返しを用意しました。

感想返し

さて、とんでもないこと突然言いますが、あまり原作見て無かったりするんです。

そのため知らなんだ、サイコメトリー。

てなわけで、能力名変えるかなんかしないな。

変更はこれ更新したときについでしますんで、

つまりは（仮）の状態にします。

だから誰かいい名前ください。感想・・・じゃ駄目か。

活動報告で募集します。

あと、これ今後ここまで長くしないようにします。

最初が長いのは200文字が、ね。（分かる人だけで結構です）

感想返し（後書き）

もう一つは普通に感想で返しています。
何でもこっちはそうしないんだろ、自分。

朝の目覚め

ブーブー・・・ブーブー・・・

目覚まし時計が鳴る。

「うん？」

もう朝か。早いな。

昨日夜更かししすぎたか？

「ニヤーン」

「おう、お前か」

目覚ましを取る。

ふむ、今は5時位か。我ながら早起きだな。

「よっしゃ、飯にすっか」

そういつと、俺は棚を探り出した。

「菓子パンしかねえ……。何でだよったく、しゃーねえな」

俺はパンと、隣にあったキャットフードを取り出す。

そして、キャットフードの袋を横に倒す。

「ほら、飯だぞー」

「にゃ〜」

猫はその袋に顔を突っ込んで食べ始める。

「それじゃ、学校にでも行くか」

そう言って立ち上がり玄関に行く。

寝たときからずっと制服だから、まあシワだらけだけど気にせず
に。

「それじゃあ言ってくるな」

猫に言って俺は立ち上がる。

「ああ、いいわすれるところじゃった。たなにあったインスタント
とエロ本、ときとうにしまつしといたからにゃ」

ブチッ（血管が切れる音）

「てめえふざけるのも大概にしるネ」おおおお！

・・・と、まあそんな感じで。

この物語は、この朝っぱらからつるさいこの花^{はな}訳^{わけ} 甲^{かい}斐^ひが主役の、
主に普通（だと思われる）（能力者達の暮らしを描く物語）（予定）で
す。

朝の目覚め（修正版）

DE。

「なんででめえここにいんだネ」

「¥」

「飯か。飯が目当てかお前」

「あつ、間違えにゃ。」

そう言って顔を搔いてから首をかしげて、

「？」

「意味無いだろ」

間違えてなかったとしても。

「えーっと、とりあえずは」

こっちも頭を搔いて聞いた。

「本どこだ」

「そこからかじゃお前」

「当たり前だ。いろいろ言いたい事はあるが、あれは友人に見つからないように慎重に買った至極の一品だ。あれのためなら、俺は命を捨てる覚悟がある」

「あんなどうしようもないものに何故そこまでするじゃ？」

いや、健全なる男子なら誰でもここまでのことはする（しない）。

とは言えどこの奴なら本当にしかねんな。学園都市って結構そういう物の規制が厳しいからな。

学生に悪影響を及ぼすものは余り入荷しないのだ。

だが、それだけの理由でスキルアウトになるような馬鹿を俺は知らない。

「でも安心するのじゃ。隠した場所はしっかり覚えてるじゃ」

「よしよくやった！出せ、早く、今すぐに！」

「急かすじゃよ」

ネコが呆れた感じで言いながら本を取りに行く。

「たゞしかゝこのにゃたりに」

「おい、はやくしろよー」

ネコに言っただけから俺はテレビをつける。

今日の天気は、晴れか。

ちなみに朝食は『激甘！蜂蜜漬けシユガートースト（粒あん入り）』
。死にそうなくらい甘い。そしてマズイ。てか何、蜂蜜漬けて
ふざけてんの。

「　　」

「おつ。サッカー勝ったのか。珍しいな」

「　　？」

「ほー。野球日本一決定な！。もうそんな時期か」

「　　」

「バレー負けたか。まあな、昨日がんばったし、仕方ないな」

「そつだにゃ。仕方ないにゃ」

気付けば横で、ネコと一緒にテレビを見ていた。

「おー。バスケだにゃ〜。始めてみたにゃ〜」

「おいネコ。何やってんだ」

「TV中継にゃ」

「視聴または実況な。本はどうした」

「売り上げがいいのは推理ものにゃ」

「確かこの辺にたまねぎ閉まってたな」

「ごめんなさい」

ネコが謝った。土下座のように見えるポーズを取っている。

「・・・言い訳は聞いてやるっ」

「た、確かににゃ、あそこのにゃ、バッグの中に入れてたんだにゃ。そしたら無くなってて」

「よし分かった」

猫を持ち上げ、たまねぎを口に近づける。

「死ぬか」

手をジタバタ振るネコ。

「ごめんにゃさいごめんにゃさいごめんごめんごめんごめんゆるしてにゃーにゃー」

と、そこで妙なことに気付く。

「お前今『バッグ』っていたか？」

「ふえ」

ネコが泣き顔で（猫が涙流すの始めてみた）振り向いた。

「グスツ、そ、そうにゃ。花柄のいかにも女物のバッグに入れたのにゃ」

そこで、昨日何があったか思い出す。

俺は友人たちと俺の部屋でオールしてたんだ。

それで花柄を持ってた奴と言えば…

「ネコ」

「にゃい？」

「たまねぎ食いたいか？」

「い、いやだにゃ」

「そうか・・・分かった」

ガララッ！

そして俺はベランダの窓を開ける。

「I!CAN!フ～ライア・ウエー……イ……!」

「イにゃ………!」

そして俺は飛び出した。

自分の部屋(マンションの12階)を。

朝の目覚め（完全版）

ところ変わって、学園都市の公園。

「あなたたち、ちゃんと分かってますか？」

男が数人怒られていた。

それも全員大柄の怖い雰囲気を出した男だ。

怒っているのは女の子だ。

彼女の名前は、寿しゅうき黄菜子きなほこ。

見た感じお世辞にもいい子とは言えそうにない。髪は紫色に染めてるし、制服も着崩れしてる。加えるなら、今の格好には不具合な花柄のバックを持っている。

そんないかにも不良といった子がしている腕章は、なんとジャツジメントのもだった。

「分かったらちゃんと返事なさい」

「「「す、すみませんでした・・・」」」

「分かればよろしい」

そういつて笑顔を見せる黄菜子。

「だめだよ、拳銃の的に空き缶使ったら」

【PC用のネタ】

「そこじゃねえだろ！」 「ふっ」

「何ごとぶら

！」 「アニキイ！」

飛び蹴り

華麗に避ける

吹っ飛ぶ男

その男に叫ぶ男達

「何してんだお前、何してんの？」

「いや、今の甲斐に言われたくないけど」

飛び蹴りしたのは、先ほど12階から飛び降りた甲斐だった。

「お前が間違えて俺の物を持って行ったから取り返しに来たんだよ」

「そうなんだ。ところでさ」

「なんだ？」

「どうしたのその格好？」

「寝てたら服装が乱れた」

「いや、そうじゃないでしょ。甲斐なんか右手が「着崩れ」おろしめみたいだけ。って何、手が着崩れみたいって」

「それは皮膚とかがこう」「それ言ったら隠した意味ないじゃん」「この作品はR 15ではありません。(今のところ)そのため、残酷な描写はしないのだ。

「さんこくにゃことは、してるのににゃ」

どこかで猫の鳴き声したが、気のせいか。

「て、てめえ」

そこで、後ろから声がした。

そういえばさつき蹴り飛ばしたな。男。
忘れてた。どうするか。

「ふざけやがって、いい加減に」

「いい加減にするのはお前たちだ！」

「は？」

突然叫んだ俺に、驚くアニキィ。(さつきそう呼ばれてたし)

「お前らスキルアウトが、この俺達に勝てると思ったか！」

「何言ってるんだおま」

「いいか！お前ら無能力者が武器無しで勝てるなんて思うな！」

「さっきから隣でうるさいよ」

大声で叫んでいる俺に、嫌悪の目を向ける女。

しかし、その大声にこそ意味がある。こんな朝早くから大声上げて騒いでいれば…

(効果音のつもり)

ほら来た。学園都市名物、警報ロボ（絶賛効果音募集中！）

「げっ！」

「に、にげる！」

そういうとアニキ達は去っていった。

「ふう。危なかった」

「ところでさ、何で来たんだっけ？」

「ん？」

そうだった。忘れちゃいけない大事なことを忘れてた。
しかし待てよ。相手は（仮にも）女で（一応）ジャッジメントだ。
普通に言ったら没収、あるいは処分されてしまう。
ここはバレないように遠回しに…。

「いや何、ちょっとお前が保険の実習用の参考書を持っていたの
で」

「これかい？」

握られていたのは保険の参考書（エロ本）

「ソウ、ソレ！」

バレてた！いやまだだ。まだ説得すれば道は開ける。

「そうか〜これなのか〜」

「そうなんだ、そうなんだよ。だからできれば何も言わずにそれを
返してくれると」

「ちえい」

黄菜子エロほんが参考書を投げる。

適当な場所に落ちる。

清掃ロボが上を通過。

「……………はい？」

『ケイコク、ケイコク、未成年ニ悪影響ヲアタエル有害図書ヲハツケン。タダチニ消去シマス』

「はいはいはいはい！！！！？？」

ちよつと待て！消去つて何？すごい嫌な予感がするよ。というか嫌な予感普通に的中してるけど！なんかこいつからシュレツダー音がしてるから！

「ふっふっふ。これで学園都市の平和は守られたのだWWW」
俺を指差し笑う女。きなこ

「黄菜子…。てっめえええええ！」

こうして俺は、
肉体的ダメージ：体中にかすり傷。特に右手が酷い。
精神的ダメージ：計り知れないくらい深い。
を負った。

今日も、いい朝だなあ。 （号泣）

朝の目覚め（完全版）（後書き）

途中であったけど、警備ロボの警報音絶賛募集中！

学校にて

「どうした」

「死んだ。これは死んだ。確実に死んだ」

学校。しかし関係ない。

「何が関係ないですか。あるに決まってるでしょう」

「ねえよ。お前らには特に」

「大方参考書がシュレッダーにかけられたんだろう」

「なんでわかんだよ」

今は自分のクラスにいる。しかし、関係ない。

「とりあえずその『関係ない』をやめなさい」

「あと、俺たちの説明しろよ。読者に分からねえだろ」

「誰だよ、読者って」

しかし、説明は大事だよな。軽く説明してやるか。

「何ですか軽くって、失礼ですよ」

ではまずこの委員長から。

委員長の名前は、ももやくい桃桜 はなか花華。

能力は読心能力 LV:3。

大体、人の考えることは理解できる。もう少し高くなると複数人同時に分かるようになるらしい。

性格はそのまんま委員長性格。票数差で生徒会には入れなかった。それだけ人望が無いってことだな。

「後で話があります。私の所に来てください」

「い「拒否権はありません」……ですか」

「で、俺はするのか」

「してやんよ。仕方無しに」

もう一人は名前だけ。

たかしまぐんじ高島郡児

名前の由来。群・児島・高いところが好き。

「相手が分からないからって余り酷いことを言っではいけません」

「ん？何？なんか酷いことでも思ったの？」

「それよりも」「あれ、委員長俺は無視？」「その怪我なんですか

「？」

「ああ、これか。安心しろ、医者いわく『ああ、この程度ならすぐに直るよ。安心するといい』とのことだ」

「そう、それと」

俺の机の上を指差す。

「何してるの？」

指差された机の上には、シュレッダーにかけられた哀れな紙切れがあった。

「参考書の修復」

「そうですか」

「そうですよ」

すると、不意に周りが静かになった。

先ほどまで凄く騒がしかった教室が、まるで怯えているかのように静かになった。

・・・嫌な予感がする。すごく。

な〜んとなく。いや、な〜んとなくだよ？心当たりなんて全っ然無いからね！

委員長の顔を、ホントな〜〜んとなく見てみた。

・・・。なんていうか、表現できないけど多分、この世の者なら

死を覚悟するような、そんな恐ろしい表情で、こんなことを言ってきた。

「KILL」

その瞬間、俺の机を炎が覆った。

えっ、普通の学校ですよ

・・・。えっと、この作品って何だっけ？
うーんとねー、えーっとねー、たしかねー。

この物語は普通の高校生（2年）のいつもの日常をただ、普通に描く物語である。

「どこが普通だー！ー！！」

「見つけたぞ！」

「遠距離可能な奴は全員ねえ！」

同時に、パイロキネシスの炎が左から。

エレクトロマスターの雷が右から。

それぞれ飛んでき

「つぶねえええ！！」

咄嗟に背後の階段から飛び降りる。

踊り場まで飛んで受身を取ったから、ダメージは最小限になった。
それよりあいつら、今手加減してなかったぞ。

Lvは確実に3だった。うん、殺しに来てるな。

「リーダー。奴は二階に逃げた模様。即刻追いかけます」

『いえ、あなた達は裏口を固めてください。奴は外に追い出しますので』

「了解」

「あの、委員長」

「何かしら」

「何し」「害虫退治よ」・・・そすか」

「さて、第2部隊は作戦通り攻撃してください」

『分かりました。委員長』
オルリーダー

「これが普通？ふざけるな。どこかの電気使いや不幸高校生が認めようと、俺は認めなああああぐはあ！」

そうだな。とりあえず説明しよう。できることだけ。

|| || || ||

始まりは入学式。学校に来た時に不良生徒数人と喧嘩したのだ。

その際に俺はボコボコにされた。しかしそれは、その不領共ではなく、そこにやって来たある女。

『おらてめえら！仕事増やすんじゃねえよクス共！』

それが最初期の花華だ。

次の日には髪が長いだけで、殆ど今と変わらない状態になっていた。その時自己紹介で言ったのは、『みんなを守る存在になりたい』と
言っていた。

中学時代はジャツジメントだったらしい。そのため、こういった思考パターンが染み付いたとか。

ちなみに、『守る』対象はこの学校の生徒だけ。それ以外はジャツジメントがやるだろとかいってたな。

|| || ||

「でもさ、みんなを守るために部隊作るのはなんか違う気がするんだよ」

廊下を走る俺。カッコいいZE。

「「俺らもそう思うー！」「」

パイロキネシストのファイヤーx3

「だったら攻撃すんなあ！」

やばい、思い出に浸ることもできないぞ。

落ち着け、学校でこんなとき役に立ちそうな場所は・・・
校庭！は死に行くようなものか。

保健室！は既に（仮）病人がいるからだめだろう。

職いだめだ！職員は全面協力してやがる。

体育館は部活動生で埋まつてるし、武道館までは距離がある。

残されたのは理科室だが、ここは相手の本拠地になっている可能性が高い。

俺のクラス8割科学部だからな。

じゃあどうする。もう他には無いぞ。

「いたぞ！エレクトロマスターは全員攻撃！回避させるな！」

「命令すんな！」

「くっ！」

挟まれた！もう考える暇も無いな！早々に行動に移す！

「本日二度目のI C A N F L Y！」

窓から飛び出す。しかし分かってるぞ。

下には能力者達が集まりこちらに向けて攻撃を構えていた。

「まあ、な」

「うん。まあ、ね」

「そうだな、まあ」

「」「」「ドンマイ！」「」「」

親指をたて、満面の笑みで言うクラスメイト達。

「まだまだ、まだあああああああああああ！」

ドカン！

その日、俺は死んだ。

そりゃもう学校ですよ

「はっ！」

気が付けば教室にいた。

右も左も、誰もいない教室だ。

「ふう、なんだ死後の世界か」

「いや、君は死んでない」

「は？」

振り向くとそこには、
可愛い女の子が・・・

|| || || ||

「即覚醒！！！」

「黙れ！」

黄菜子（忘れてたがこいつも同じクラスの同級生だ）の右ストレイト
「ぐはぁー！」

もろに顔面にはいった。
マジいてえ。

「てかはっ！こごとこ！さっきの女の人はい！」

「何言ってるんのお前？」

「あれ！？何でお前らいいの！！！？俺はさっきまで女の子とLOVE
E LOVE空間にいたはずなのに！！！！？」

「お前、シネヨ」

コンパス×3がこちらを向いて浮き上がる。

「ごめんなさい。嘘ついてました。冗談です。きつと漫画の見すぎ
でした。スミマセンデシタ」

「何で最後が片言なの？」

そこに、委員長がやってきた。
委員長が……

「レツゴースICANFLY！」

大丈夫！ここは三階だ！飛び降りたところで死ぬことはない！

「頭から落ちれば死にます。後、自習でも授業中。今外には気の荒いことで有名な3年生がいますよ」

「ガツデム！」

腹話術で声が遅れて聞こえてくる。

「なに無駄な高等技術使ってるわけ」

「とりあえず」

委員長花華が、ある紙を広げる。

それは俺を追い詰めた部隊『セフトウオーリア自衛学生』（巷じゃ結構有名だ）のフォーメーションだった。

「今回久しぶりだったのでこのフォーメーションを取りましたけど、どうでした？」

「ねえハナちゃん、さすがに追いかけてた人に聞くのはちょっと」

「合格と言いたいがやはり多人数に対して弱いよなこれ」

「何で答えてんの甲斐！」

「あと、ここが余分じゃないか」

「そしてあんた誰？」

「高島だよ！な」やはりここは人数を減らすべきでしょうか？
「って委員長何本気にしてんの！？」

「「「黙れクズ」」」

「「「うっ、酷い」」

と言う感じで（どんな感じ？）俺の学校紹介だ。

名前は各自それぞれ考えろ（投げやり）言えることは不良校なのに
エリート学校であること。

能力者適性があるわけではなく、どのLvの能力者でも入学できる
高校だ。

そのため結構スキルアウトなんかもいるらしいが、しかし学力はと
ても高い。

某どこぞの有名大学なら半分は合格すると言われてるぐらい頭が良
い。

ただし、8割AKIBA系いわゆるオタクの人だと言う。

また、この学校は文武両道として、体育の時間が異常にハードなの
だ。

おかげで1年は最初筋肉痛になるの間違いなし。

そしてここから旅立っていった先輩は必ず科学者かボディービルで
活躍すると言う。

なんでだよ。他の選択肢はないのかよ。

「とりあえず、先ほどの紙は処分しました」

「そんなのあんまりだ!」

「そうですよ委員長!せめてこいつ(高島)の学校に隠してる本全部処分しないと…」

「タカシマクン、チョットハナシガアリマス」

「委員長、俺腹痛いから保健室行く!」

「KILL」

一斉にクラスメイトが立ち上がる。

「奴を」

『『『了解』』』

「なんでだ————————!」

これが俺の学校、いや、この学園都市の普通の光景です。

そりゃもう学校ですよ（後書き）

えっと、これまでがいわゆるプロローグにや。

この後の物語も大体変わらず馬鹿なことをするにや。

それでもいい人は今後もみてくだしいニヤ。

七話といじ名の第一話 だといいな

さて、とりあえず2日目。

「とにかく、飯食うか」

「にゃんかいろいろいたいけれど、とにかくかくまぐるがくいぢやいぢや」

「平仮名で言うな。読者が読みにくいって何だよ読者」

「お前はしらにゃくていいいぢや」

そうか、気になるな。

とにかく、朝飯食うか。

ねこはフードがあるとして、俺はインスタント・・・忘れてた。インスタントねこが処分したんだった。後で確認したが、どうやらカラスの餌になっただらしい。からす・・・

「ねこ。お前の名前『ねこ牙鳥かじす』でどうだ」

「明らかに猫関係ないにゃ。後、メスにゃからにゃ」

別に『鴉』は男の名前ぢやないぞ。

「腹が減ってはなんトヤラ〜」

「なんだそれ」

とりあえずマジでなんか食おう。
たしかここにインスタント…ってさっき確認したところじゃん。

「仕方がねえ。コンビニ行くか」

振り向きつつねこを持ち上げる。

「うにゃ？何故持ち上げるにゃ？」

「うまくいけばお前の飼い主見つかるかもしれないだろ」

一応こいつの面倒ばっか見てられねえんだよ。

「それに」

「それに？」

ねこが首を傾げる。可愛らしい。

「なんだか今日、可愛い子に会える気がする！」

強く拳を握り締める俺。

「知らんがにや。そしてありえんにや」

七話という名の第一話 だといいな（後書き）

この主人公の能力『翻訳通話』は、普通に考えたオリジナル能力です。

だいたいレベル別で、

LV：1…英語が少し得意

LV：2…外国語全般が結構得意＋動物の言いたいことが少し分かる

LV：3…どの国の言葉でも聞き取れることはできる＋動物と会話可能（野生は無理）

LV：4…どの国の言葉でも会話ができる＋動物と会話可能

LV：5…？（よく考えてない。この上があれば機械とか建物と会話可能かも）

って感じ。分かりやすく説明してみましたかどうか？

活告（活動報告の略のつもり）でも載せておきます。見なくてもいいですけど、興味があれば。

コンビニ

「かわいくないし・・・めんどくなやつだーーーーー!!」

「誰が面倒だ。それに可愛いわ」

コンビニのレジ。

そこには、俺がもっとも会いたくない奴がいた。

ああああああああ。こいつに会う時間帯だった~~~~~。

どうする、よく考えろ。今ならまだ間に合うか。

否、それはない。

だが、だがしかし!

「男には、やらなきゃ行けないことがあるん」「ちえい」「ギャアアアアアア!」

逃げ出そうとしたら吹っ飛ぶ俺。

「ふっふふふ。私から逃げようとするのが悪いんだ」

レジ店員が胸を張って見下ろしてくる。
胸を、張って・・・

「揉ませ」「とりゃ」「ゴハアアアア」

飛び上がった瞬間に触られ、店の中をすごい勢いで転がる俺。
ちっ、こいつは、ヤバイ。

「俺が巨乳好きの変態と間違えられてしまっ」

「実際そうじゃん」

「フゼケンナ！」

レジ員に向かって叫ぶ。

さっつて、そろそろキツくなってきたので、説明したいと思います。
こいつは、いや、本当なら『この人は』と、言っべきなんだが、
名前を林^{はや}木森^{きもり}といい、このコンビニの店長兼、俺のマンション
の管理者をしている。

俺の学校は学園都市では多分、結構珍しい、バイト可能な学校で、
俺はここにバイトでたまに入っている。

まあ実際、強制的に連れて来られてから、レジに無理やり立たさ
れるんだがな。

で、特徴は、まあ、なんだ、既に分かってると思うが。

「大きな胸。揉ませ」「チエスト」「ブバアアアア！」

飛び掛ったが、再び触ったときに吹っ飛ぶ俺。
後ろにあった陳列棚にぶち当たった。超痛え。

ここで、吹っ飛ぶ理由だが、こいつも超能力者なのだ。
元は生徒だったが、卒業してからもコンビニや管理人やらで居座
っているらしい。

「そして胸でか」とわ「ドルバアアアア！」

触れられた途端ひざをつく俺。
さっきから何やってんだ、俺。

ところで、気になり始める人もいるだろうが、こいつの能力。
本人も同じことを言っていたが、大したことは無い。
単なる発電能力エレクトロマスターのLv:2だ。
それで吹っ飛ぶ理由。それは…

「筋肉バ「ちね」「ガアアアアア！！！」

店長が倒れた俺の肩を掴む。

触れられて殴り飛ばしているのがいつものことなのだ。
たしか、空手で黒帯って言ったな。
だから、こんな風にずっと掴まれるのは珍しい。

てか、死ぬ！肩思いつきり掴んでるんだけど！
ヤバイ、こいつ気にしてのか。殺しにキテルゾ！

(しかし、これはチャンスじゃないか？)

薄れる意識で、俺は思いつく。

肩を掴んでいる以上、俺はすぐ近く近い位置でアレが見える。

アレとはつまり、男なら誰もが触れたい幸せの双子山だ。

手を伸ばせば届く距離。しかし、俺はもう指一本動かせない状態だ。

だが、それもかし！手が駄目ならばどうするか？

答えは一つ！

俺は、脚で思いつきり踏み出す。

「!?!」

そう、目の前にあるならぶつかればいい。

なぜならそれは、ものすごくやらかい双子山なのだから。

「ウおおオオおおオオお!!」

店長の胸に顔が近づく。

あと少し、あと少しで…

ウィーン

「店長買い物来たよ」

フォン…

「いらっしやいませー」

店長が、まるでレポートを使ったかのようにレジに戻る。
と、いうこと、は？

「ダアアアアアアア！」

叫びながらレジ台に突っ込むことになった。
あれ、確かこの真上におでんがあったな。
ああ、なるほど。そういうことか。

ドバツ！（おでんがかかる音）

ジュウウウウ（何かが焼ける音）

まあここで焼けてるものは決まってるんだがな。

「ギジャアアアアアア！」

魔王もびっくりの叫び声をあげる俺だった。

・・・。

「本当に普通の学生なのかにや？」

店の外で待っているねこが呟いた。
…気がした。

ロンビニ(後書き)

どうでもいい気がします。が、学園都市ってバイトありませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6935z/>

とある普通な能力者達

2012年1月14日11時48分発行